対談：大野慶人＋及川廣信

司　会：國　吉　和　子

國吉：今日は故大野一雄さんとのデュエットと，慶人先生のソロを拝見させていただきました。まず，及川先生にご覧になった感想などを伺います。

及川：今日はそれほど良くなかったね。（笑）あなたは大野一雄を超えていると思っていますよ。

國吉：慶人さんと及川先生がお会いになったのは，パントマイムの会からですね。

慶人：土方さんとサンケイホールにマルセル・マルソーを見に行って感動しまして，マルソーに手紙を書いたら，フランスに来いと返事をもらったのですが，お金がなくていけませんでした。そんなことがあったもんですから，マルソーの師のエティエンヌ・ドゥクルーに直接師事された方とうかがって及川先生のところへ行きました。先生のエティエンヌ・ドゥクルー仕込みのマイム，さらにクラシックバレエまで懇切丁寧に教えていただきました。それは私にとってかけがえのない，本当にいい時間でした。

國吉：それは「禁色」1959年の前ですか。

慶人：いえ，「禁色」の後です。

及川：「禁色」の前ですよ。「禁色」の舞台であなたはマイム的なアクションをやってます。

慶人：は，そうですか。（笑）

及川：７年間一緒にやったんですよ。その後大野さんが70歳になってからどんどん世界的になっていったんですが，彼はものすごく世話をしている。ものすごくつらい期待を感じていたんですよ。かれはお父さんを超えているんですよ。今日は親父さんのために踊っているし・・。

慶人：ガラッとレパートリを変えて今日の舞台にしたんです。それまでは自分の踊りを踊ろうと一所懸命だったんですが，今日は大野一雄の会なので，ここで自分のものを見せる必要はない，と思いまして，昨日，決断しました。

國吉：最初はアルヘンチーナ頌の冒頭シーンを再現されました。

慶人：ええ，客席から立ち上がるところですね。お客さんと一緒に入ってきて，誰かしら，と思っているうちに，突然立ち上がる，という冒頭のシーンです。

及川：やっぱりこれは綺麗事ではなくてね。今や大野一雄と土方巽は新興宗教みたいになってしまって・・，これはいかんですね。これまでの舞踊は，三胚葉のなかでも中胚葉（筋肉と骨）で踊っていた。それに対して舞踏は、内胚葉（内臓）でやっていて，一雄さんは皮膚，つまり外胚葉なんだ。そういうことをわかりたいんだけど，なんだかよくわからないまま，もやもやしてる。なんとなくもやもやしてて，新興宗教みたいになっているんで。

大野：それはいけないですな。（笑）

及川：あんたがしっかりしないといけない。蹴飛ばせばいいんですよ。批評家も説明しない。おんなじことをやっているんですよ。ダメなんですよ。ダンサーたちも自分たちが何をやっているのか，説明しないし。

大野：最近，若い人たちがついに反乱を起こしましてね。いいことだな，と思っています。

及川：どんどん蹴飛ばせばいいんですよ。どんどん出てゆけばいいんです。はっきり言えばいいんです。批評家はやっぱりだめなんですよ。舞踏は今の東電とおんなじことをしているんですよ。

大野：はいっ。（笑）大野一雄が土方さんからディヴィーヌという役をもらって客席から出てくるところがありますが，大野一雄はクリスチャンですし，ミッションスクールの先生でしたから，その人が神を裏切る役をするのかと僕は思いましたよ。そしたら，やります，先生，神に唾をはきかけてくれ，そしたら大野一雄はビャーっと踊ったんですよ。僕はクリスチャンでもないでしょ。だから裏切るものがないんですよ。

國吉：及川先生はお父様を裏切れと。

慶人：ほんと，そうですね。（笑）

國吉：後半のうさぎのダンスについてお話いただけますか。

大野：この大震災があって，祈らなければならないと思っているのですが，生身の私が祈るというのもなんか気恥ずかしい気がしていまして，ランボーの詩の中に「大洪水の後で」というのがあって，舞踏を始めたころに読んで感激した記憶がありました。その中で，野兎が一匹，大洪水のことをみんなが忘れたころ，ふっと野で祈ったという，その祈りに感動しましたので，そこを踊りに持ってきました。この野兎が今だから祈る価値があるんです。

及川：大野一雄は胎児なんです。大野慶人は少年なんです。人間的な演技なんですよ。二人を一緒にしては困るんです。分野が違う。同じに語ってもらっては困るんですよ。

國吉：少年といえば，慶人先生は最近乳歯が抜けたそうですね。

慶人：一本しか残っていないです。この乳歯がな

くなったら，舞踏ができなくなってします。土方さんもかつて，頬が少年のようだと言われて，まだ踊るぞと思ったといっていたことがありました。みんなどこかに踊る根拠を探しているんですよ。

シンガポールで公演してきたばかりですが，そのフェスティバルのタイトルが「Ｉ want to remember 」。覚えていてほしい，ということだったんです。その若いディレクターは今，世界で歴史的に大切なことが大人が語り継がないから忘れられてしまっている，天安門事件のことだって，今，中国の若い人たちはほとんど知らない，それではいけない，ということでこのタイトルとなったといっていました。それで私が踊った後，あの兎について聞かれました。で，40年前の兎だといったら，喜んでいました。

國吉：確かに，今は語り継がれなければならないこと，また，体で伝えていかなければいけないことがたくさんあります。それなのに，ほんとうにあっという間に忘れてしまいがちです。それをもう一度思い起こすことは，アートに携わる人々の大切な役割でもあります。

短いセッションとなってしまいましたが，時間がまいりました。本日はありがとうございました。